

北アルプス第一のマイナーコース 船窪岳・不動岳・烏帽子岳

藤井 諭

一昨年に蓮華岳に登った時に稜線上の船窪小屋を発見し、話題のあの”ランプの宿”に泊ってみたい、と思ったのが今回のきっかけとなった。船窪小屋から船窪岳、不動岳、南沢岳を経ると200名山の烏帽子岳がある。しかし後立山の白馬岳～針ノ木岳の華やかさに比べて地味な存在だ。野口五郎岳から水晶岳、鷲羽岳へと続く裏銀座コースとの狭間でもある。バスはなく個人で行くには不便で、山小屋も少なく北アルプス随一のマイナーコースと行って良い。

ランプの宿と先鋭な烏帽子岳には憧れがあり、一方で北アルプスの懐深く入り込んでの絶景は定評がある。盆明けの8月19日(土)～21日(火)の日程で、ツアー登山でこれを実現することができた。参加者17名に1名のガイドと2名の添乗員が付く3泊4日の山行だった。初日の朝に大阪をバスで出発し登山口の七倉山荘に宿泊。2日目は七倉尾根を登り船窪小屋に宿泊。3日目は船窪岳、不動岳、南沢岳、烏帽子岳と縦走して烏帽子小屋に宿泊。最終日は北アルプス三大急坂のブナ立尾根を高瀬ダムまで下り、タクシーで七倉山荘まで移動して入浴・昼食の後、バスで大阪に夜9時に帰った。

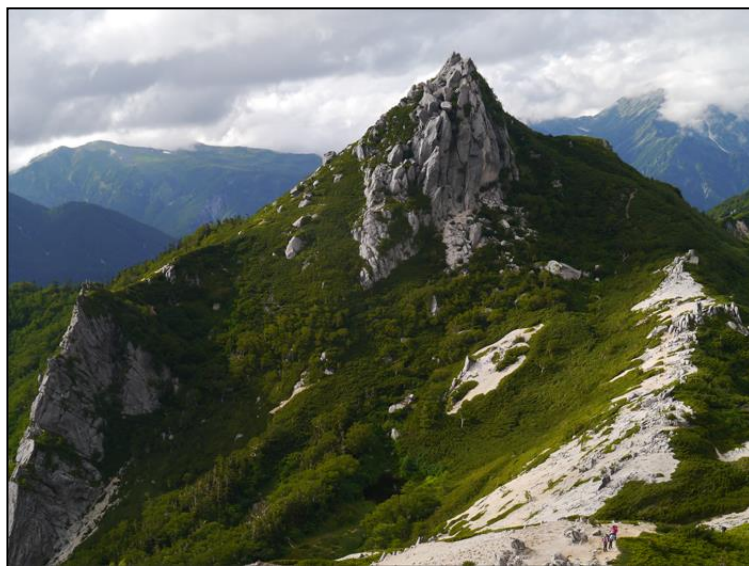
山中では3日とも晴れて、素晴らしい展望に恵まれてたくさんの風景をカメラに収めることができた。レベル5の山行だけに、男女とも強者ぞろいだった。想像以上に船窪岳、不動岳、南沢岳を経て烏帽子岳に至る縦走路はアップダウンが激しく、山肌が崩壊して危険箇所も多数あった。暑さで汗が吹きだし水分を頻繁に補給しながら進んだ。登り返しは花崗岩の崩壊道でズルズル滑り踏ん張りが効かない。あまりのしんどさに不動岳では睡魔に襲われたが、パーティに迷惑をかけないようひたすら鼓舞して歩き続けた。烏帽子小屋は遥かに遠く一日11時間の行程は厳しかったが、縦走を無事に終えた充実感は大きかった。

船窪小屋は発電機を使わず静かで、夜はランプと太陽光蓄電の照明のみで風情があった。有名だった老夫婦は引退し息子が営業していた。食事も大変美味しかったが、水は往復1時間の水場から運んでいるという。我々も有志6名で1時間かけてその水場へ水汲みに行ったが、急坂とガケの連続で“最も危険な水場”と言われていた。水は湧水で冷たくて美味しく、しっかりと水筒に詰めて翌日の行動の力水となった。

コラム1：ガイドから聞いた面白い話

- 登山ガイドの永井さん(まだ若くてハンサム)から行動中や山小屋で聞いた話だ。
- ・冬山登山と山スキーがブームとなっており、積雪期はそれらのガイドで忙しい。蓮華温泉を中心に梅池高原、雪倉岳、白馬岳への山スキーが多い。南アルプスだと黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳、鳳凰三山の冬山登山、八ヶ岳、谷川連峰の雪山も人気がある。岩登りやボルダリングも人気がある。今は雪山と岩登りのガイドが自分の本業だ。
 - ・人気だった好日山荘が今は不振で、石井スポーツに吸収される話がある。理由は登山用品のみで、スキー用品を始め広くアウトドアを扱っていないことによる。登山人口は高齢者が中心のためこれから減っていくのに対し、スキー、スノーボード、スポーツクライミングなどは若者を中心に増える傾向にある。モンペルも石井スポーツ同様に好調で、登山用品店はこれから淘汰されて行くだろう。
 - ・宿泊山行での軽量化に着替衣類を減らす方法として、防臭剤の有効活用がある。着替えたいくなるのは臭さがあるからで、臭さを取れば着替えは必要なくなる。長い山行ではその分軽量化され、楽になると考え方を考えてはどうか。

船窪小屋から烏帽子小屋までのルートは、11 時間もかかる長く厳しいものだった。船窪乗越まで高度差 300m も下り船窪岳まで 250m 登り返す。再び下って不動岳へは高度差 300m の登り、次の南沢岳は 250m のアップダウンだ。そして最後にそそり立つ烏帽子岳へのピストン。不動岳の登りではバテ気味となり睡魔が襲ったが我慢し、足を前に進める気力を保った。其々の山頂では大展望が広がり、撮影に追われて忙しく疲れを忘れた。烏帽子小屋は遠かったが到着した喜びは大きく、キンキンに冷えたビールが極上に美味しかった事が忘れがたい。



最終日のブナ立尾根は合戦尾根、笠新道と共に北アルプス三大急坂と言われるが、下りのみのため楽だった。この尾根は裏銀座のルートに当たるため、前日の縦走路とは打って変わり沢山の登山者と出会った。登山口の高瀬ダムは幅 362m、高さ 176m もある巨大なロックフィルダムで青い水を湛えていた。一般車は七倉山荘までしか入れない。ここはタクシーしか入れないため予約で待機させてあった。七倉温泉で入浴してサッパリし、イワナ料理に生ビールで山行終了の余韻に浸った。

コラム 2 : 裏銀座の冬山合宿の思い出

私が約 40 年前の年末にこの山域へ入った時はまだ高瀬ダムはなく、葛温泉から高瀬川沿いに歩いたことを思い出した。延々と歩いて現在の東沢出合まで入ると、対岸に高嵐山(2152m)へ続く高嵐尾根がある。この年の奥多摩山岳会の冬山合宿はここで行われた。

渡渉して尾根に取付き、人海戦術でラッセルを繰り返しテント泊しながら登っていくと、野口五郎岳の南の真砂岳(2862m)に至る。今回は私を含む 4 名が水晶岳のアタック隊に選ばれ、稜線直下でテント泊をした。しかし北アルプスの真冬の稜線は厳しくて一晩中強風が吹き荒れ、テントが吹き飛ばないようにポールにしがみついて朝を待ち、順番に仮眠を摂るのが誠一杯だった。

翌日の稜線歩きは強風に吹き飛ばされないよう、ピッケルで耐風姿勢をとりながら進んだ。喘ぎながら水晶岳の山頂に至り、眺めた風景は強烈で忘れ難い。三又蓮華岳の雪の斜面が小屋を埋めてキラキラ光り、その右に真っ白な笠ヶ岳と黒部五郎岳が聳えている。左奥には槍ヶ岳が聳え、その稜線は雪煙を吹き上げていた。すべてがモノトーンの風景は美しいと共に、真冬の北アルプスの凄さを感じた。今はもう出来ない青春の体験だった。その時の 3 人の仲間は今も奥多摩山岳会で元気に活動している。